

## シベリアの傷痕

熊本県 小佐井 善次

元外務省関東局警察官として大連で勤務中、昭和二十年八月十五日天皇陛下の玉音放送、無条件降伏である。

ラジオの前に署員全員が集まり直立不動の姿勢で無口で泣いた。机を叩いて泣いた。長い戦争が終戦となる。

その後関東州庁長官の命に依り大連市内の居留民の治安維持に当たり、ソ連軍と共に行動を共にしていた。ソ連軍の武装解除を受け、壊れた橋や道路の補修作業に一週間位協力してくれとの申し入れに依り、一週間分の食糧と夏の下着三枚程の軽装で地下足袋で本庁に集合した。

上官の命令は絶対的に疑わなかった当時の官吏は、そのまま大連駅より有蓋貨車に分乗、ソ連兵の厳重な

監視の下に旧満州海上に集結した。元日本軍の兵舎跡である此処で民間人、軍隊と一緒に編成し海上を出発した貨車は北へ北へと進行した。

上官の命令には絶対的であった我々も、やっとソ連軍にだまされて拉致されソ連国内に連行されている事がわかり、進行中の貨車より一人二人と飛び降り、貨車の半分位の同僚が逃げた。残りの半分は運を天にまかせて貨車の人となった。さすがソ連国境の鉄条網を通過する時は残り全員静座して遙か東の方を拝み、皇室の安泰と家族の幸せを願い合掌し泣いた。

貨車は昼夜とまる事なく進行し、十一月三日チタ地区第二四收容所チエルノフスカヤ炭坑分所に到着した。見渡す限り雪の原野で広々と鉄条網で囲いその中に半地下の棟があり、それが我々の住居であった。附近には何一つとしてなく、雪を集めて飯盒で飯を炊いて食べたのが十一月三日で、今でもこの日を抑留記念日としてただ一人、再びこのような事が起こらないように祈りを続けている。

到着後暫くは收容所内の仕事で建築の手伝いや穴掘

り等で、夜は着の身着の儘で寝る、寝ても寝ても眠れないので朝になって見ると背中の下に霜柱が立っていた。幾度も寒さの為眠れない事ばかりであった。

昭和二十一年四月頃より作業場が決まり、自分は炭坑で削岩手の所でエンピ組み積み込み、運搬、坑木の組み立て、八時間三交代制、四人一組で作業ノルマを達成する事になっていた。

生まれて見た事もない坑内作業で不安である。坑内は常時粉塵や発破のガス、灯油ランプの黒煙が充満し鎮静する暇がない。

切羽の所まで歩いて二十分位で着いたが、途中坑道は真暗で、小さいランプの灯を頼りに前後を確かめるためお互いに大きな声で「オーイオーイ」と呼びながら切羽の所に歩いて行った。

換気装置は全くなく、発破の爆破と同時に火薬の悪臭と、もうもうとした粉塵とで、狭い坑道は視界がわからない。その中を手探りで発破地点に急いで行き、崩れた鉱石をエンピでかき出し、リレー式に送り出して「トロ」に積み込み、押し出し、坑外に引き揚げる

「ワイヤ」に連結するのである。室のトロを引き込み、積み込み、押し出す事の繰り返しで、八時間中に発破で崩れた鉱石を全部坑外に搬出しないと九時間でも十時間でも監督が帰さなかった。

苛酷なノルマを押しつけられ作業中は水一滴もなく休暇もなく、飢えをしのいだ。我慢しなければならなかった。

ある時八時間が終わり、三時間過ぎても監督が帰さないで、日本人の通訳が収容所長の命を受け迎えに来たので帰ったこともあり、全く人間としての労働力の限界をこえた苛酷な労働であり、今思い出すと身震いする思いである。

粉塵の中での作業に「マスク」も手拭いも使用出来ず、交代して坑外に出ると目も口も鼻も顔も黒人のように真っ黒くなり、痰をすると真黒な痰が出、毛穴も黒く飯盒に雪をとかして洗った位ではとれない。

いつも黒くて、一か月に一回の入浴があったが石けんなし、手拭いなく手の平でなでるだけであった。食糧は一日黒パン三百グラム、その半分を食い、後の半

分は帰ってからのため残して作業に行く。作業が終り收容所に帰ると残したはずの半分のパンがない。居残りの誰かが食ったに違いないが、仕方なく附近の草を集めて飯盒で炊き、それをのんでしのぐだけである。

身も心も人間ではなく生ける虫けら同然で、欲もなくだだ食う事ばかり、会話となれば故郷の食物自慢である。ぼた餅、味噌汁がのみたいと鼻水たらしで話すだけで腹一杯となり、寝ても眠れない。

そのうち「シラミ」の襲撃に会い、真夜中に「ペーチカ」の前でシラミ取りである。全く色青く栄養失調で身体はむくんで、異国の地で死んだ同胞がどれだけいたかわからない。

昭和二十二年十一月頃身体の調子が非常に悪く、毎日の重労働で疲労困憊して半病人になり、ソ連軍医の命令で一切の作業を離れて收容所内で休養する事になっていたが、人員が足りないので作業に出よとの命令で急に坑内作業に従事した。

坑内と坑外の間で「トロ」の監視役で、脱線その他の事故が発生すれば速やかに警報器を鳴らし処理す

る現場であった。

その日はからからした寒い曇り日和で、零下六十度あるとソ連兵が日本人の通訳に話した事を覚えている。三交代制の三番目の夜十二時より翌朝八時に交代する組である。交代前三時間位前の午前五時頃だったと思う。夜の明け方寒さは例え様がなく、酷寒骨身を刺す極限の寒さで全く想像を絶する死闘の作業場であった。その時急に全身が針で刺すような痛さで、飢えと寒さで「ぶるぶる」震えが来て、胸や横腹がどうする事も出来ない程痛み出した。息をすると胸や横腹に響き呼吸が出来ない状態である。

今この作業場で死ぬのではあまりにも残念であり、日本に帰るまでは俺は絶対に死なないと自分の心をはげましながら両肘で両横腹を押さえ、両手で胸を押さえその場に動けなくなった。

我慢したが咳が出始め、痰も出たが、同時に咯血もした。掌で受ける程度に血が出た。何回も咯血したが交代が来るまでその場にいた。

交代要員が連れ出してくれ、收容所の医務室で診断

の結果、急性気管支肺炎と診断された。直ちに入室療養したが、薬もあまりなくなつただ安静にしているのみで熱は三十九度であつた。段々と熱も下がり三十七度五分位まで下がつたが、痰に混じて血が出た。

二か月程してから他の収容所より転動して来た日本人軍医の診断では急性肋膜炎と診断された。医師の言いつけをまもり療養に努めた結果、翌年春頃熱も下がりに退室した。

しかし風邪を引き易くなり、すぐ熱が三十七度五分位は出るようになり、咳も痰も出ていたが、収容所内の休養であるため時々炊事の飯あげに出された。

少し運搬すると呼吸が荒くなり、動悸がして胸辺りが痛み出し、仕事にならず人様に迷惑ばかりかけていた。熱が下がれば軽作業に出され、療養は全く出来なかつた。

昭和二十四年九月頃、我が収容所に異動命令があり、帰国のために収容所を出発した。乗り込んだ列車は途中何回となく下車させられ、全員作業に出された。要するにナホトカまで途中何回となく下車させられ、作

業を続けながらの移動であつた。

或る町で道路作業中に激しい悪寒にさそわれ、全身ぶるぶると震え、胸や横腹が痛み出し咳痰が出始めた。高熱で作業中止となり、宿舎に帰り部屋に寝ていると日本人の衛生兵が来て処置をしてくれた。熱は四十度あり息苦しくて、胸は痛みどうすることも出来ず、ソ軍の医師の診断は急性肺炎であつた。

一晚中日本人の衛生兵の方が水枕で冷してくれたため熱は三十七度五分まで下がつたが、ソ軍医師からは胸が悪いので入院を命じられ、ソ連軍の病院に入院させられた。

しかし帰国途中であるため一週間位入院して再び帰国列車に乗せられ、一路ナホトカへ向かい、十一月中旬ナホトカ港着、下旬まで待機となつた。乗船するまでは帰る事が出来るか否か全く安心は出来ない不安の毎日であつた。

やつとの事で栄豊丸に乗り込み十二月四日舞鶴に上陸したが、熱は三十七度五分位はあつた。咳も痰も出ていた。引揚援護局医師の診断を受け、身体障害者事

実証明書を後日のため頂いた。

ただいま苦勞の一端を思い出して事實は事實として申し上げましたが、私達のシベリア抑留は第二次大戦中の小さな歴史であるかも知れないが、決して忘却してはならないのであります。単に遠い苦しい思い出として語る事ではすまされないのであります。

飢餓と酷寒の苛酷な重労働でたちまち多くの日本人の命が異国の果てに奪われていった。この極限の生活を生き抜いて奇跡的にも祖国の土を踏むことが出来た私達はまことに幸運であったと思わざるを得ないのであります。まことの生き証人であります。

しかも四十年もすぎた今なおシベリア抑留者の中に、鉱山での強制労働により健全であった五体は蝕まれて、シベリアの傷痕は体の奥深く刻み込まれ、病状は進行し、病魔に冒されているシベリア引揚者の苦しみがある事も決して忘れてはならないのであります。またシベリア抑留の後遺症でシベリア珪肺、じん肺でありながら知らずに家族と共に世を憚りながら暮らしている人々、この事が原因で入退院を繰り返して一人前には

何も出来ず、勞働も出来ず、ただ迷惑者あつかいされている引揚者老人がいる事も忘れてはならないのであります。

## 重い飯盒、中味は石

千葉県 富田 美德

昭和二十年十二月一日、ソ連領に入った。すでに酷寒（零下）で刃りは雪一色、空は灰色に曇り西も東も判らず、只只黙々と行動を続けるのみであった。それは、ひたすらに故国へ帰れると思いつながらである。しかし、何か一抹の不安が脳裏をかすめた。徒歩で一日半ばかりして名も知らない駅に着いたら、真黒な有蓋貨車が数十車両とまっていた。すると直ちに乗車せよとの命令が届き、それぞれ編成毎に乗車、あらぬ方向へ走り出した。

貨車の中は暖房が無く、一車両に四十人位が体をくっつけながら暖をとった。帰国するのにどうしてソ